

## 第 61 回 伊達政宗の城づくり・街づくり

今年には政宗公の生誕 450 年(1567～1636)ということで、仙台を始め東北では各地で記念行事が行われています。仙台市の博物館でも、大々的な展示が行われ、政宗ブームの高まりを感じます。ローカルな話題ですが、視野を広げて、歴史の流れと国際的な意味についても考えてみたいと思います。

じつは地元、河北新報の紙面に投稿した「持論時論」(6/17,10/4)にも既に書いたのですが、もう一度論点を整理し直して、本欄で書いてみましょう。始めに論点を提起しておきますが、政宗の城づくり・街づくりは、①戦国時代の豊臣 VS 徳川の対立の中で、政宗が徳川の鎖国主義の立場に立っての事業だった。②「四ツ谷用水」など、名取川・広瀬川の自然エネルギーを基礎にした、「水系モデル」の地産地消の街づくりだった。③徳川幕府を支える意味で東京・江戸の外堀の街づくりにも、政宗と仙台藩が大きく貢献した。以上、政宗の貢献により、徳川幕府 300 年の安定と平和な時代が日本列島に確保されたのです。

まず①についてですが、政宗は 1567 年米沢に生まれ、豊臣秀吉の「小田原攻め」に参陣した後、本拠地を岩出山城に移され、1592 年に秀吉の命で「文禄の役」で朝鮮にも出兵した。しかし、朝鮮出兵はそれだけで、「慶長の役」(1597～98)には参加しなかった。それどころか 1600 年の天下分け目の「関ヶ原の戦い」では、朝鮮征伐など「侵略主義」の秀吉から、逆に「鎖国主義」の徳川家康の側に付き、東北で上杉景勝軍と戦った。

この 1600 年に、政宗は本拠地を仙台に移し、城の縄張りを開始した。翌年、本格的に仙台城と城下町の建設を開始し、1610 年には天守閣の代わりに「大広間」を造営して、1614～15 年には徳川家康に従って「大阪の陣」に参戦、徳川幕藩体制の構築に貢献しました。このように政宗は、徳川「鎖国主義」の重鎮として東北で幕藩体制を支えながら、しかし 1613 年に支倉常長らをスペイン・ローマに派遣している。謎の「慶長遣欧使節」です。誰のため、何のための遣欧使節だったのか？

16～17 世紀以降、世界市場の拡大とともに、西欧の資本主義が本格的に発展し、アジアにも進出してきた。最初のグローバリズムでしょうか？ その対応を巡り、日本でも西国の諸大名を中心に覇権を争い、天下の統一を目指しました。戦国時代です。ただ、東北では領土争いはあったものの、覇権を目指す争いではなかったようです。グローバリズムの覇権を握ったのが豊臣秀吉です。文禄・慶長の役で朝鮮にも出兵した。この朝鮮出兵には、さらに明との戦闘も目指されていたし、西欧の植民地支配に対抗する秀吉の野望もあった点が重要でしょう。

伊達政宗も、上記の通り秀吉の「小田原攻め」に参陣、さらに朝鮮出兵にも「文禄の役」だけは付き合った。しかし、朝鮮支配には反対だったのか、次の「慶長の役」には参加し

なかった。秀吉のグローバリズムには付いて行かなかった。それどころか上記「関ヶ原の戦い」では、家康の反グローバリズム＝鎖国主義に協力、天下統一に力を貸しました。東北の雄であった政宗の協力があってこそ、続く徳川 300 年の平和と安定、仙台の繁栄と伊達の文化の華が開いたのです。家康・政宗の鎖国主義連合の形成と同時に、仙台城の築城と仙台の街づくりも開始された点が重要です。

②ですが、まず仙台城の城づくりにしても、戦国大名の大城下町の多くが「臨海型立地」だったのに対し、仙台の「青葉城」は広瀬川を十二分に生かした天守閣のない山城ないし平山城であり、それも東京の江戸城に次ぐ大規模な城郭を築いた。それは城壁につながる「竜の口溪谷」の深淵を覗けば、誰でも一目で判る。鎖国主義の守りの堅さを象徴した立地選択だったと思います。

街づくりも同様です。「町の中心に平城を置く米沢や会津若松と異なり、仙台は堅固な城と経済発展を目指す町をはっきり区別した。」(菅野正道氏、河北新報「独眼流 挑んだ道 生誕 450 年」9/5 付)。つまり、広瀬川を間に挟んで、河岸段丘の対岸に市民を戦乱に巻き込まない平和主義とともに、徳川・封建主義の 300 年の安定と繁栄につながる思想の街づくりだろうと思います。こうした思想から、広瀬川水系など自然エネルギーの「地産地消」の街づくりの根幹をなした「四ツ谷用水」の開発も進められたのです。

「四ツ谷用水」、地元の仙台でも長く忘れ去られていました。最近、話題になっていますが、「政宗の命を受け、名土木家の家臣川村孫兵衛が難題に向き合い、……1620 年代に着工し、4 代藩主綱村が治めた元禄時代」(河北新報、9/7 付)に完成した用水路です。「東部の農業地帯に欠かせない用水路の七郷堀、六郷堀も広瀬川を取水源とし、幾星霜を経て出来上がった水の道。沿岸部の運河、貞山堀(36 キロ)は歴代藩主にわたって苦心の末、内陸と海をつないだ。瀬音ゆかしき杜の都は、輝く陽光を映す水の都でもあった。」(大和田雅人『四ツ谷用水 光と影』河北新報出版センター、2017 年刊)

城下町の市民生活は、町内を縦横に限なく流れるように開発された「四ツ谷用水」によって支えられた。その本流は、広瀬川から取水されて梅田川に通じ、三本の支流と沢山の枝流を備えていた。防火用水、散水、洗濯用水などの生活用水、さらに地酒の醸造や水車動力、農業用水など、産業用水としても広く利用された。これ以上立ち入りませんが、まさしく自然エネルギー、さらに「地産地消」地域循環型の「水系モデル」の構築だったと言えるでしょう。

さらに③ですが、「四ツ谷用水」に見られる政宗・家康の封建主義・反グローバル連合の街づくりが、江戸の街づくりにも応用されたのです。仙台市が作ったパンフ「東京に残る伊達政宗公ゆかりの地巡り」によれば、現 JR 御茶ノ水駅(東京都千代田区・文京区)の前を流れる「神田川」は、飯田橋駅近くの牛込橋から秋葉原駅近くの泉橋まで「その開削工事を仙台藩が請負ったことから<仙台堀>と呼ばれていました。……神田台と呼ばれる台地を掘り割って川を流した、当時の大工事の苦労が偲べれます。江戸城外堀の工事には

伊達政宗が関わっていました。」

さらに、江東区深川には「仙台堀川」があります。当時は、この堀を利用して、仙台から送られてくるコメなどが仙台藩の蔵屋敷に運び込まれたので、仙台堀川と呼ばれるようになった。仙台堀川は地図で見ると、隅田川と荒川をつなぐ位置づけです。仙台の「四ツ谷用水」の考え方が、江戸の町づくりに生かされていたかも知れない。「仙台堀」といい、「仙台堀川」といい、仙台「四ツ谷用水」の水系モデルが、江戸幕府の城下町づくりに応用されていたのではないかと。

それだけではない。上記、仙台市のパンフには「江戸城外堀の工事には伊達政宗もかかわっていました」とある。そうだとすれば、外堀の四ツ谷、市谷、飯田橋、水道橋、そして御茶ノ水、秋葉原といった、広く神田川水系と仙台・四ツ谷用水との関連も気になってくる。果たして、東京の「四ツ谷」と仙台の「四ツ谷用水」とは関連があるのか、無いのか？ 関連ありとするなら、どのような関連なのか？ 仙台・四ツ谷用水の自然エネルギー、地産地消循環型の水系モデルが、江戸幕府の東京の街づくりに多大な影響を与えた点が重要です。

グローバリズムの呼称はともかく、16～17世紀からの世界市場の拡大が、植民地支配と結びつきながら、19世紀末からの帝国主義、そしてポスト冷戦の米ネオコンによる一極支配のグローバリズムをもたらした。そうした風潮に影響されているのですが、このところ支倉常長の「慶長這欧使節」の話題が仙台では表に出ているのでしょうか、このところ支倉常長の「慶長這欧使節」の話題が仙台では表に出ている。しかし、謎に満ちた話より、政宗・家康の鎖国主義の城づくり・街づくりこそ、伊達政宗の偉業として、学ぶべき価値が大きいのではないかと。

世界市場の拡大によるグローバリズムの前提に「近代国民国家」があり、経済的に世界市場のグローバルな発展が進んでも、また「世界資本主義」の支配にもかかわらず、「世界国家」が形成できない点にこそ、市場経済と国家権力の緊張関係がある。そこにまた、今日の国際的諸問題の発生の根源もあると思います。しかし、今や TPP から永久脱退を宣言した米トランプ政権の誕生、英国の EU 脱退など、また地域や所得、資産の格差は拡大を続けるグローバリズムの破綻は明らかです。東日本大震災後の「地域創生」を目指すうえでも、政宗・家康の反グローバル連合の城づくり・街づくりから学ぶべき点は大きいと思います。